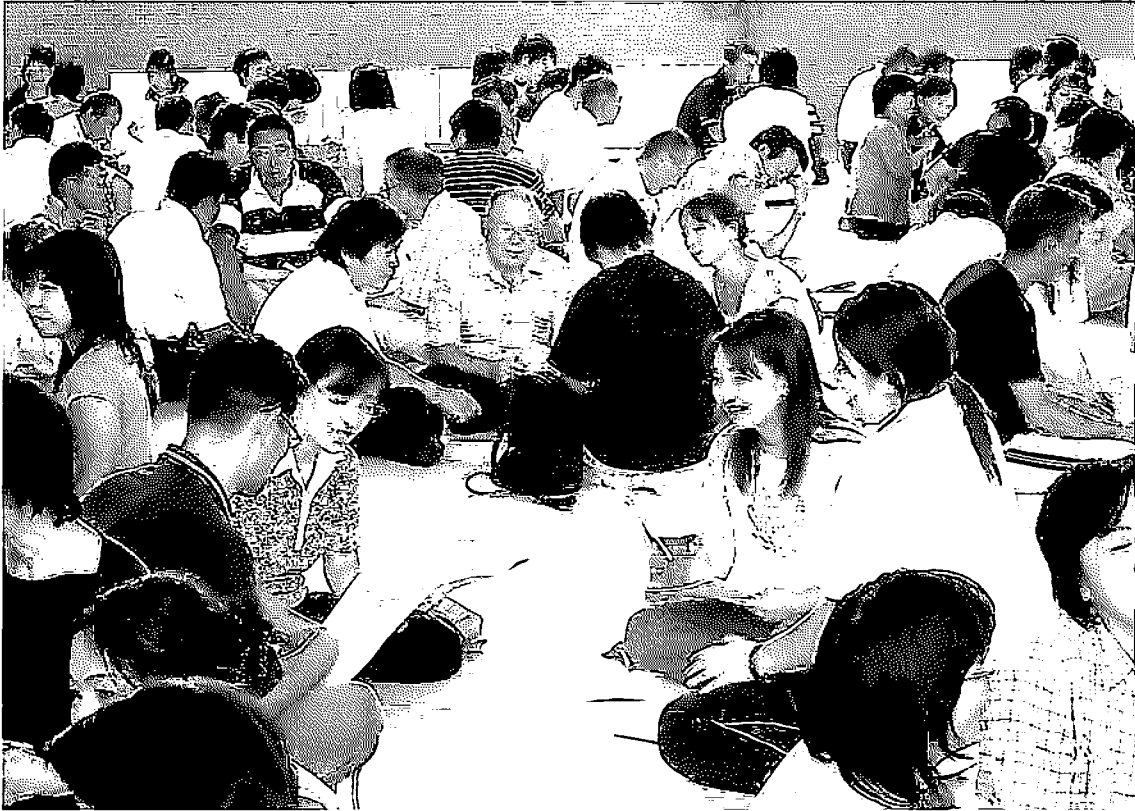


つながりあうことうら

第3号 2006.11.1 発行：琴浦町同和教育推進協議会



第2回琴浦町差別をなくする町民集会

(2・3面)

二〇〇六年七月七日、まなびタウンとうはくにおいて、琴浦町同和教育推進協議会総会を開催しました。総会において、新しい会長に琴浦町助役の山下一郎さんが就任しました。今後、より一層、推進体制の整備充実に努め、同和教育の推進を行います。

新会長あひさつ



琴浦町助役 山下一郎

二十一世紀は人権と環境の世紀といわれていますが、本町同和教育推進協議会は、昨年設立し一年が経過しました。

琴浦町では、『琴浦町あらゆる差別をなくする総合計画』が策定され、本年は具体的な、『実施計画』の策定作業が進められています。また、『琴浦町男女共同参画推進条

例』が制定され、男女共同参画社会の実現を目指した具体的な取り組みが展開されるものと確信しております。

町民一人一人を大切にし、人権を尊重した差別のない社会の更なる創造のため一層の努力を傾注し、同和教育を推進してまいりたいと考えています。

そのためにも、推進体制の更なる整備充実に努め、琴浦町民が一人一人の人権を大切にしたい差別的ないすみよいまちづくりに向けて、町民皆様の格別のご理解とご協力をお願い申し上げます。

同和教育部落懇談会 意見 (4面)

赤碕中学校部落解放文化祭 (5面)

第2回差別をなくする町民集会

町民集会のねらい

◎共に、自らを語り合い、年代、地域、性別など様々に異なる人の思い・願いを聞き、しつかり受けとめることの重要性を確認する。

◎自らの意識や行動を振り返り、町民一人ひとりを大切にするまちに向け、これから自分がどうあるべきか、地域、町をどうしていくべきか話し合い、行動化につなげる。

テーマ

『部落差別をはじめあらゆる差別をなくすための一人ひとりの主体的な行動をめざして』
「町民一人ひとりがつながりあう人権尊重のまちに向けて」
◎わたしたちの身近な生活の中にある、そして自分自身にある偏見・先入観に気づき、差別を許さない生き方を明確

にする。

◎同和教育のすばらしさ、語り合うことの大切さを再認識し、同和教育を継続して学ぶこと、一人ひとりが主体的に行動することの必要性を確認する。

◎地域の問題はみんなで話し合い、共通理解し、解決方法を考え、合意、決定し、解決のために行動することが必要だということを理解する。



講演

「差別を残しているもの」

——同調と傍観——

人権学習ファシリテーター 加藤 敏明さん

二〇〇六年八月十九日、東伯小学校において、差別をなくする町民集会を開催しました。

全体会では、大阪府の部落解放・人権研究所で各種講座・教材作成の企画等をされていた加藤敏明さんから講演をいただきました。

その後、十二の分散会に分かれ、人権尊重のまちに向けて、話し合いました。

今日はこうして多くのみなさんが集まっている。何のために集まるのかというと、私はつながるために集まるのだと思っている。今まで会ったこともない、話をしたこともないみなさん同士が、出会いとつながりをつくっていくことが、この集会で一番大切な

ことだと思う。

「うれしい言葉・いやな言葉」について話し合ってもらった。人にはげまされると、すぐく勇気をもらえる。人に支えられるとすぐく安心感がある。その反対に、人は無視をされるのが一番つらい。無視とは、自分の存在が認められないということ。まず、自分の存在を認められて初めて大切にされると感じる。人権の一番の基本は、その人の存在が認められるということ。これが人権の核。

うれしい言葉が多ければ、つまり自分の存在が認められ、大切にされているなど感じたとき、人間は力が湧いてくる。もう一つ、口先だけでなく、心の底から「ありがとう」と言ってもらえると、人間は力が出てくる。「ありがとう」という言葉で成り立っているのはボランティアではないか。こうして、まず自分の考えや気持ちをお互いに出し合う。それがお互いの存在を認めるといふこと。中身の是非はあるが、まず、自分が考え



ていること、感じていることを出し合う。

自分が今立っている所から出発する。自分自身のスタート地点から始める。無理矢理ゴール地点に連れて来られてもズレが生じる。テーマエと本音がズレる。自分自身がスタート地点から一步一步進んでいかなければならない。そのため対話を粘り強く続けていく。

それが民主主義の形であると思う。民主主義というのは本来そうして、非常に手間と暇のかかるもの。時間をかけて私たちが一步一步前に進んで行くこと。そうすることによって、私たちは自分に対して主人公になれるし、社会に対しても主人公になれる。私はそう思っている。

分會

町民一人ひとりがつながりあう

なぜ、話し合いが必要なのでしょうか

講演の感想など

◎参加型の研修会で自分の弱さを感じた。仏滅・友引にこだわりのある。うれしい言葉が思い出せなかった。人から言われていないからなのか。自分も言っていないことに気づいた。

◎家族や周りの人の存在が温かく感じられて帰れます。温かい言葉が本音で言える。職場でのあいさつも相手を見ないで返していたことに気づいた。これからは相手を見てあいさつをしなればと思えました。

◎六曜が会社の手帳から消えたが、それでも周りに流されてしまう自分がいる。

◎六曜の件、清め塩の件について、なぜそこまでこだわるのか。個人の自由ではないか。使いたいと考える人に、それは間違いと強制することはおかしいのでは。

◎六曜や清め塩を自分の意志

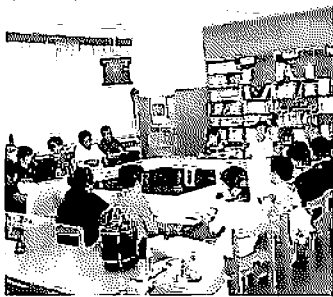
とは無関係に使わされている現実があるのではないか。身内・周囲の態度や無言の威圧などによって、自らの意志を表明することさえできないのでは、おかしなこと。また、

それらを使用する根拠を知らないまま、うのみにせず、しっかりと考え直してみることは大切なことだと思う。

同和教育を通して

気づいたこと学んだこと

◎私の同和教育の学びは職場からスタートした。最初は強制的だったような気がする。学習を重ねれば重ねるほど、差別に気づく自分に成長した



ように思う。学習を通して人の温かさを感じられた。

◎「女性は男性より一步下がって」という家庭で育ってきたため、自分の思いを表出しないで、抑えてきた感じがある。同和教育を通して、表出する事、決め付けない事、迷信・慣習から解放たれる事を学んだ。

◎一人ひとりが自信を持つこと。社会意識や周りを気にしないでいては自信を持てない。自分らしく生きていく立場に立てた。それをしつづけていくことで自分も他人も大切にできると思う。今は同和教育に出会えてよかったと思ってる。

◎自分を語るのは勇気のいること。だが話さなければ通じ合えないことをいろんな会を通して知った。部落問題を通して、いろんな差別が見えてきた。まだ見えてない部分に気づけるよう今後も参加していきたい。

集会について

◎研修会にはいつも仕方なく



参加する感じだが、参加したあとは必ずいくつかの発見があり、参加してよかったと思える。

◎まず参加することが大切だが、毎回同じメンバーに感じられる。まず自分自身が教育を受ける。様々な方の話を伺えば何か得るものがある。作物を育てるのにも手間がかかる。ましてや自分の子や孫を育てるのも手間をかけないと、思っこのような会に参加している。

◎研修会の雰囲気も様々だと思うが、よく学習している人から、学習不足だと指摘されるだけで、いろいろな意見を聞き入れようという雰囲気がない会もある。そういう会では参加していても発言できない。

いし、おもしろくない。
◎学習年数によって、このような場での発言回数、内容は違ってくると思うが、参加者が自分なりの答えを見つければよいのではないかと思う。

その他の意見

◎同じ考えの人の中で話すのではなく、部落内で正しく啓発する力を身につけ、地域に出ることが大切。みんながそれぞれの思いがあり、他人にうまく伝えていけない自分がある。もどかしい。

◎学校の中にはいろんな大きな問題がたくさんある。その内の一つが給食費の問題。払えるのに払っていない人もあるようだ。それをしっかりと確認しなければならぬ。

◎目の前にある現象には背景があるので、目に見えたことだけにとらわれないようにしようと言っている。言葉をかけあってお互いを認め合う。これができるのはなぜか。個人の責任ではなく、状況を思いやって言葉をかけるようにしたい。

2005年度 同和教育部落懇談会

懇談会のねらい

◎各部落で話し合い、同和教育のすばらしさを実感し、自らの生き方を問う。

◎各部落ごとで懇談会を行うことで、遠い会場である研修会等への参加が難しい人など多くの人が参加し、同和教育を学習する。そして、まち、地域のさまざまな人権問題解決に向け、話し合い、行動化につなげる。

この教材を使つての懇談会のねらい

子どもたちが発する言葉の乱れ(障がいのある人にかかわる言葉として差別用語が使用されている等)や、公共施設での落書きの現状から学ぶ。
【町同推協作成教材】

◎単に子どもたちの発言や落

書きをする人の問題ではなく、

わたしたち大人が日常生活の中で子どもたちに影響を与えていることに気付くとともに、障がいのある人に対して抱いている差別意識、他人を見下している意識を改め直す。

◎身近な生活の中にあるさまざまな偏見や先入観、差別につながる慣習や制度を考え、これらを存続させているのはわたしたち自身であることに気づき、それを許さず、なくしていくための取り組みを語り合う。

◎地域の問題を話し合い、共通認識し、解決策を考え、行動化につなげる。

昨年度、同和教育部落懇談会で実際に出された意見の一部を紹介します。

☆…参加者の意見

★…意見についての説明

☆なぜ、資料には、障がいのある人と「がい」を平仮名で

書いているのか。

★「害」とはものごとを「傷つける」という、他に対して危害を与える意味があります。「害虫」「有害」等好ましい意味にはなりません。

わたしたちは、一人ひとりが人を大切にし、尊敬しあう生き方を同和教育から学びました。そしてその取り組みの素晴らしさを実感してきました。

そんな中で、「害」がふさわしくないと考え、懇談会の資料では障がいのある人と表記しました。

☆普段の言葉遣いは無意識が多い。指摘されて初めて深く考える。その言葉によって傷つく人のことをもう一度考えてみる必要がある。

☆自分が大切にされていれば、このような言葉を使つたりはしないとと思う。

☆差別は自分より強い人にはしない。自分よりも弱い人に

対して、見下す意味も込めて「うざい」と言うのでは？

☆同じ家族でも父親よりも母親に「うざい」と言いやすい気がする。

☆差別用語などは親もしつかり勉強して子どもに教える必要があるため、こういう勉強会は大事だと思つう。

☆子どもより大人の意識の方に差別が残つていふと思つう。

子どもたちに差別の意識を植え付けているのは大人ではないかと思つう。大人がまず偏見をなくするのが先だと思つう。

☆偏見を持つて生まれてくる子どもはいない。大人が植え付けていると思つう。いい教育を受けている子どもたちを大人が曲げていくようなことに注意されることも多いと思

う。その時は大人がきちんと受け止め、直していかなければいけない。

☆障がいのある人が積極的に外に出て行けないのなら、その人たちが不自由なく暮らせる場を作つていく必要がある。引きこもらず、どんどん意見を出していくことも大切だと思つう。

高齢者の人権について

☆部落の中で、高齢者にかかわる人の苦勞、悩みなど多くの話が聞けて、地域でみんなが暮らしていくための情報の共有と共通理解ができました。これからの部落の人の輪(和)づくり、地域づくりの糧にしたいと思ついます。

結婚差別について

☆被差別部落の人と結婚したこと、自分の親戚の冠婚葬祭へ出席ができなかった話を聞き、ショックを受けた。

★他人事と思わず、自分はどうだろうかと、自分自身に差別意識がないか、自らを見つめ直すことが必要です。



赤碕中学校 部落解放文化祭

はじめに

二〇〇六年九月九日、農業者トレーニングセンターにおいて、「第七回赤碕中学校部落解放文化祭」を行ないました。

この取り組みは、一人ひとりが尊重される社会をつくるために、二〇〇〇年度より行なっています。部落差別をはじめあらゆる差別をなくすために、生徒・教職員・保護者等がこれらの問題に対する認識を深めるとともに、あらゆる差別をなくすための意欲と実践力を養うことを目的としています。

取り組みの内容としては、①解放「学習会」参加生徒による解放劇を、全校生徒及び全職員、保護者等で鑑賞、②解放劇を題材とした全校生徒・全職員および保護者等での学習、③全体学習を各学級でさらに深める学習を行なっています。

解放劇「つながる…II」

赤碕中学校「解放劇」の取り組みは、解放「学習会」に参加する生徒が、自分たちの生まれたふるさとに誇りを持ち、自分を語る生き方ができるようと、一九八六年度から始まり、今年度で二十一回目を迎えました。

解放劇では、解放「学習会」に参加する生徒が、一人ひとりが尊重される住みよい社会にするために何ができるのかを訴えます。そして、どのようにすれば部落差別をはじめあらゆる差別をなくすことができるのかを問いかけていきます。

今年度は「つながる…II」という題で解放劇が演じられました。(以下あらすじ)
「クラスの中にいじめがある。このような状況の中で、クラスには、いけないと思いつながらなかわかると自分がいじめられるのではないかと注

意できない人、いじめられていないからと無関心でいる人が登場する。しかし、主人公は親との会話の中で、仲間とともにつながり合うことの大切さを知り、そして、人のせいにして、自分の問題としてとらえず、結局は実際にクラスの中で起きている状況に対して何もできていない自分に気がつく。そして、解放「学習会」の仲間と意思を語り合う中で、みんなも同じ思いをもっていることを知り、行動へと移っていくのである。一人ひとりが大切な存在である。また、そのかけがえのない一人ひとりは、一人では生きていくことができない。人とかかわりの中で生きていくのである。だからこそ、すべての人が幸せに生きるために、人と人との「つながり」が大切なのである。」

今年度の解放劇は、仲間として「つながる」ために何が大切なのかを訴えかけていきました。

全体学習

その後の全体学習では、解放劇の問題提起を受け、生徒・教職員、保護者等が自身、および自らの生活を振り返りながら学習を進めていきました。

学習では、①自分は今クラスの中で思いが言えるのか、②①について、言えるのであればなぜ言えるのか、言えないのか、③「本当の仲間」とはどのようなものなのか、④仲間として「つながる」ために、どのように行動していくのか、またまわりの人たちにどのようなことを求めるのか、⑤なぜ、そのように行動することが仲間と「つながる」ことができると思うのか、ということについて思いを語り合い、参加者全員で共有していきました。

《学習後の生徒の感想》

◎自分の思いを相手に伝えることが大切だと思った。私は今まで自分の思いを相手を受け入れてくれるか不安で伝えることができなかったけど、自分の思いを伝え、相手の思いを受け止めていきたい。

◎自分の思いを言うのが苦手でしなときがある。でも、自分の思いを伝える大切さかわかったので、これからは普段の学習のときなど自分の思いを言うようにしていきたい。

◎言いたいことがたくさんあったけど、発表することができませんでした。でも、三年生や二年生、そして一年生のたぐさんの人の発表を聞いて、他の人がどう思っているかわかったし、自分の考えを振り返ることができました。

◎自分が本音を言えなかったら、相手も本音で返してくれない。自分の思いを伝えること、そして相手の思いをしっかり聴くことにがんばっていききたい。



同和教育とは、自分自身のために学ぶことであり、 自らの生き方を問うことです。

〈みんなの願い〉

- ◎ 幸せに生きたい
- ◎ 人間として豊かに誇らしく生きたい
- ◎ 自分が自分らしく生きたい
- ◎ 仲間とともにうれしい出会いをしたい

〈大切なこと、理解すべきこと〉

- ◎ 自分の命は尊く、自分しかかけがえのない大切な存在
- ◎ 自分と同じように誰の命も尊く、誰もがみな大切な存在
- ◎ 誰もが、幸せに生きたいという願いをもって暮らしている
- ◎ 一人ひとりを大切にし、お互いを認めあうこと

〈自分は、自分の周りはどうでしょうか〉

- ◎ 現実には、今も部落差別をはじめあらゆる差別が存在しています。
- ◎ 一人ひとりが大切にされていない現実に気づき、それを変えていくことが大切です。
- ◎ 差別のある世の中に暮らすということは、自分自身が、差別をする、差別をされる可能性があるということです。

部落差別は今も残されています

これまで繰り返し行ってきた取り組みにより、自分の生き方や生活、さらには地域の慣習などを見直してきました。

しかし、差別意識は根深く存在しています。近年、町内でも差別発言、身元調査などの事象が発生しています。

また、自分では差別をしているという意識もなく相手を傷つけてしまうこと、人からの指摘や人の考えを聞き、自分の差別意識に気づくこともあり積極的な学習が必要です。

部落差別は重大な人権侵害であり、すべての人の幸せに生きたいという願いを踏みつぶすものです。

- ◎ 差別をしているのは、自分自身です。そのことを自らに問い、気づくことが必要です。
- ◎ みんなの命や暮らしを大切にしようため、自分自身にも、自分が暮らす生活の中にも偏見・先入観があることに気づき、改めることが必要です。

自分には、出身、障がい、性別、年齢、国籍、病気にかかわることなどに対して、偏見・先入観はないのでしょうか。

〈同和教育とはどんな教育なのか〉

- ◎ 自分の命は尊く、自分しかかけがえのない大切な存在であり、同様に誰もが大切な存在であること、そして、一人ひとりを大切にすること、お互いを認めあうことの大切さを学びます。そのためには、共に、自らを語りあい、他の人の思いや願いをしっかりと受けとめあうことが大切です。そして、お互いに励ましあい、寄り添いあうことの大切さを学ぶのです。
- ◎ みんなが幸せに生きるために、そして、誰かのためだけでなく自分のために、学ぶものです。自分を含め、みんなが幸せに生きるため、差別があり、差別が許される現実があってははいけません。身近な生活の中にある、そして、自分自身にある差別意識に気づき、それを改める人間になるよう学び続けるのです。
- ◎ 同和教育は、自分自身の意識、行動を振り返り、どういう人間として生きていくのか、自らの生き方を問い続けるものです。

〈同和教育を学んで自分がどう変わるのか〉

- ◎ 共に、自らを語りあい、相手の思いを受けとめあう仲間づくりができる。
- ◎ 生活の中でさまざまな間違いに気づくことができる。その間違いを指摘するなど改めるよう行動できるようになる。
- ◎ 自分自身が差別をしていることに気づき、改めることができる。
- ◎ 自分自身のために、差別を許さない生き方、姿勢を明らかにすることができる。
- ◎ 人を大切にできる人間になるため、常に、自らの生き方を問い、生活することができる。
- ◎ そのためには、継続した学習が大切だということに気づき、学び続ける。